

## (1) ドイツの森林資源

一年間のドイツ留学中の住まいは、森林の中にたたずむ学生寮の 2 階の小さな部屋であった。大きく取り付けられた窓から外をのぞくと、野生のリスやウサギが自由に駆け回るのどかな風景や、大木と大木の間にハンモックを吊るして昼寝をする男子学生、杉の木の木陰に腰を下ろして読書をする女子学生、誰もが森林の中で自由に暮らしていた。買い物へと出かける際には、木々の間につくられた小道を自転車で走りぬけた。散歩をする年配の夫婦、ジョギングをする若いカップル、その小道は森林の恩恵を受けたい人々が集まってくる穴場となっていた。森林を大切にし、暮らしの一部とする光景は、ドイツでは珍しいことではない。森林は、ドイツ人達に余暇を過ごす場所を提供するだけでなく、林業の面において多くの雇用を生んでいる。

ドイツの森林面積は、国土面積の 3 分の 1 を占めており、年間 5000 万 m<sup>3</sup> の木材が生産されている。ドイツの林業の分野では 9 万 8000 人の雇用があり、売り上げは約 22 億円にのぼる。製造業や建設業などの木材関連産業も含めると、雇用者は 132 万人、売り上げは GDP の 7% を占めている。また森林付近に産業が築かれるため、それぞれの地域において経済的な原動力となっている。林業が基盤となって、製造業などの大きな産業を支えているのである。

森林の役割は、ドイツの事例で見たように、文化的・経済的側面に影響を与えるだけではない。CO<sub>2</sub> の吸収によって温暖化を緩和させる機能や、空気の浄化機能、土砂災害を防止する機能、水源地や生態系の生存環境としての機能など、多面的な役割を果たす。

本章の目的は、こうした森林の多面的な役割に着目し、地域資源としての森林活用について考察することにある。本文では、まず日本の森林の現在の状況を報告し、それを問題として捉え、今後の地域資源としての森林のあるべき姿を描きたい。尚、ここでは、岩手県大槌町の「復活の森」プロジェクトを事例に取り上げ、東日本大震災以降の森林の役割についても触れることとする。

## (2) 日本の森林資源

日本は世界有数の森林大国である。こういうと驚く人がいるかもしれないが、これは紛れもない事実なのである。日本の国土面積の 3 分の 2 は森林であり、これは先進国の中でスウェーデンとフィンランドの次に並ぶ、高い森林率なのである。日本の森林は、原生林、二次林、人工林の 3 つで構成されている。原生林は、自然の力で形成された森林、二次林は、里山や雑木林を指し、人工林は、建築用木材としてつくられた森林である。森林面積はほぼ横ばいだが、森林蓄積は過去 40 年間の間に 2.3 倍にも拡大した。とくに、人工林の森林蓄積は 5 倍にも拡大しており、日本には伐採適齢期の森林資源があふれているのである。

それにもかかわらず、日本の木材自給率は 3 割にしか及ばず、残りの 7 割は外国産の低価格の輸入材に頼っている状況である。間伐作業や森林の整備、主伐作業をしても、それに見合う利益が出ないため、林業に従事する者たちの意欲は低下し、若者離れが後を絶たない。1960 年には 44 万人いた農業就業者が、現在は 7 万人にまで減少し、林業の高齢化が深刻な問題となっている。それに伴って、日本の森林は荒廃し、限界集落地域までもを生んでしまっているのだ<sup>ii</sup>。

過度な森林資源の利用が、森林を荒廃させ、人間生活にも影響を及ぼすという恐れがある。森林の劣化による水害や土砂災害、資源不足、こうした経験を世界は、歴史上何度も繰り返してきた。だがこうした問題は、日本の森林においてではなく、木材の輸入先である相手国において発生しているのである。日本と取引のある国の代表例は、アメリカ、カナダ、オーストラリア、チリで、国内需要量の約 7 割は輸入木材に頼っている状況である。さらに、木材の船による運搬は、環境負荷へともつながっている。地球規模で環境配慮型の社会が求められる中で、日本は自国の森林の活用にもっと目を向けなければならない時がきている。

### (3) 『吉里吉里国復活の薪』プロジェクト

ここでは、東日本大震災後に、森林を地域資源として活用する、岩手県大槌町吉里吉里地区の事例を紹介したい。海に面したこの地もまた、震災の大津波によって、壊滅的な被害を受けた。自身も避難者であった芳賀正彦氏は仲間とともに、避難所での焚火や仮設風呂施設に、津波で流された瓦礫の廃材を利用して、その廃材利用に着目し、『吉里吉里国復活の薪』プロジェクトをスタートさせ、廃材を薪にして販売するという活動を始めた。建造物の瓦礫の中から集められた、スギやアカマツの廃材の釘や金具を手作業で取り除き、薪割りをして米袋に詰めたものを、『復活の薪』として販売をした。瓦礫の撤去作業が進んだ現在、このプロジェクトは終了したものの、今度は芳賀氏を理事長とする NPO 法人『吉里吉里国』がスタートした。

もともと吉里吉里地区の里山を所有していた漁師達が、副業として里山の人工林に入り、間伐作業を行っている。その間伐材から、建築用材や木工製品、バイオマス燃料材、さらに『復活の薪 第 2 弾』をつくり、販売する。この活動を通して、整備された豊かな森をつくり、そこから流れた土壌の養分によって、吉里吉里地区の美しい海をつくろうと取り組まれている。全国から注文が殺到する復活の薪の売り上げは、『吉里吉里銭シコ』という名前の商品券へと変わる。町内での新たな買い物システムの中で、経済の促進もねらう。

また、ここでは幼児から小学生を対象とした、森林の学習教室も、定期的に開かれている。鉋や鋸を子供達に握らせ、木々の中で汗を流し、自然の尊さを学ばせることを踏み台として、将来的に若者がその地に残る、ふるさとづくりを進めている<sup>iii</sup>。

#### (4) 森林資源はどのような目的で再生されるべきか

日本は、国土の 3 分の 2 を埋め尽くす森林という資源を持っている。それを利用せずに海外からの安い輸入木材に頼り、日本の林業は衰退の道へと走った。そして現在の日本には、林業の衰退による限界集落の農村と、伐採を長く待ち続ける荒廃した人工林が残った。自分たちの目の前にある資源を使わずして、海外の森林や輸送段階に環境負荷さえも与え、こうした結果が引き起こされたという事実はあまりにも悲惨である。

一方で、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災も多くの悲惨な現実を日本に突き付けた。大津波によって、東北地方の沿岸部にあった人々の暮らしや、漁場が全て奪われてしまった。そうした中から生まれたのが、前述した岩手県大槌町吉里吉里地区の「吉里吉里復活の薪」プロジェクトであった。このプロジェクトが、単なる経済的な復興を目的としているのではないことが、筆者にとって大変興味深かった。漁場を失った漁師達が、荒れた森林に入り、森林を整備する。それは豊かな森をつくるだけではなく、再び漁場を蘇らせることも視野に入れた取り組みなのである。

私たちが地域資源の利用を考えると、その資源がそこでどのような役割を果たすのかを明らかにしなければならない。人間の営利的目的か、持続的な地域をつくるためのか、はたまた自然を守るためなのか、その目的によって地域資源のあり方も変わってくるであろう。それは日本の森林が物語っている。人工林という資源の目的は、人間の営利的な生活を豊かにするためであった。もしその目的が、現在の吉里吉里地区のプロジェクトのように海とのつながりや、数世代後の地域の活性化を目的としたものであったなら、日本の森林はもっと息づいていたのかもしれない。まさに今、私たちは蓄積した森林をどう活用していくべきなのかを問われているのである。

---

i 森林環境研究会『森林環境 2013 特集・地域資源の活かし方一人・自然・ローカルコモンズ』朝日新聞出版

ii 林業・森林学習室ホームページ <http://www.shinrin-ringyou.com/> (1.5.2014 現在)

iii 特定非営利法人吉里吉里国ホームページ <http://kirikirikoku.main.jp/index.html> (1.5.2014 現在)